シゴトビト

言語聴覚士

春日居サイバーナイフ・リハビリ病院
リハビリテーション部
安富朋子（やすとみともこ）さん（28歳）

撮影・星野達哉

話して食べて 笑って

発音練習重ね

病気や交通事故などで脳の神経や血管に異常が起きると、言葉を話せなくなったり、相手の言葉を理解できなくなったりする失語症などを発症する場合がある。のどや舌の神経の働きが鈍くなり、食べ物を飲み込めなくなることもある。

言語聴覚士は言語や聴覚にかかわる障害が残った人への訓練や指導を通し、その機能を回復させる仕事だ。

安富さんは山梨県笛吹（ふえふき）市にあるリハビリ専門病院で働く。訓練室で患者と対面し、それぞれに合ったリハビリをこなしている。

「これは何ですか」。安富さんが果物の絵が描かれたカードを机に並べ、失語症の高齢女性に質問した。言葉に詰まると、「果物ですよ」「最初の音は『み』から始まります」などとヒントを出しながら、名前を答えてもらう。

病院に来たばかりの頃は全く話すことができなかったが、この女性は訓練を重ねるうちに、「うれしい」「悲しい」といった感情や「わかるよ」などの言葉が出るようになった。

脳出血で倒れた60歳代の別の女性は、左半身がまひし、口から食事も取れなかった。呼吸もうまくできず、気管を切開してチューブを入れていたので声も出ない。

まずは右手で紙に文字を書いてもらうところから意思疎通（そつう）を図り、唾液（だえき）、水、ゼリーと徐々に飲み込めるようサポートする。発音の練習も重ねると、徐々に会話もできるようになった。最初はベッドで泣いていた女性から「あなたのおかげで生活ができるようになった。ありがとう」と言われ、心から、この仕事をしていてよかったと思った。

「話すことと食べることという大きな楽しみを失った人の笑顔をもう一度、取り戻し、また人生の新たな一歩を踏み出せるような支援を続けたい」と語る。

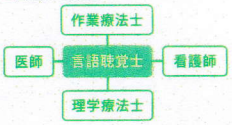
安富さんの1日

- 8:00 出勤
- 8:40 医療スタッフとのミーティング
- 8:50 リハビリ
- 12:30 昼食
- 13:30 リハビリ
- 17:00 診療記録や訓練教材の作成など
- 18:00 退勤

言語聴覚士になるには

高校卒業後に国が指定する大学などの養成校（3～4年制）に進むか、一般の大学を卒業後、専修学校（2年制）で学ぶのが一般的。いずれも、その後に国家試験に合格する必要がある。勤務先は病院や福祉施設、学校など幅広い。

●関連する業種



笑顔

突然、思うように話せなくなったり、食べられなくなったりする精神的ショックは計り知れない。患者が少しでも心を開きやすいように、常に笑顔で接することを心がけている。

観察力

適切なリハビリを計画し、実行していくには、患者のちょっとした変化も見逃さない観察力が必要だ。性格や興味、家族などに関する情報を集め、人物を理解することにも努めている。

向上心

最新の知識を吸収しながら、リハビリのノウハウやスキルを磨くことも大事。医療関係者の研修会に参加したり、先輩のアドバイスを受けたりしながら、日々模索している。

私の失敗談

全てを受け止める

担当した2人目の患者さんは重度の失語症でまったく言葉が話せなかった。必死に何かを訴えようとしていたのに、理解してあげられず、結局その人は心を閉ざしてしまった。「患者さんはあなた以上に悩んでいるんだよ」。先輩にかけられた、そんな言葉にハッとした。以来、「患者さんの全てを受け止めよう」という気持ちを大切にしている。

マストアイテム

手作り数百種類

表面にカラーのイラストが描かれ、裏面にはその物の名前や説明が書かれている。全て安富さんの手作りで、その数は数百種類もあるという。クイズのようにこのカードを使い、患者に声に出して表現してもらうことがリハビリの第一歩だ。

MESSAGE

1989年　静岡県磐田市で生まれる
2007年　静岡県立袋井高校卒業
2011年　聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部卒業
春日居サイバーナイフ・リハビリ病院勤務

つらい思いなくしてあげたい

中学時代は「人の役に立つ仕事がしたい」と考えていたという安富さん。言語聴覚士の仕事に興味を持ったのは高校3年の時。地元・浜松市の保健医療福祉の人材を養成する大学のオープンキャンパスで出会った先生から、「この仕事に就いたら、毎日が発見と感動の連続だよ」と言われたのがきっかけだ。

手の動きや表情から、会話ができない患者の気持ちを理解するのは簡単ではない。だが、注意深く観察しながらリハビリの計画を立て、社会生活に復帰するまで見届けられるのはすごく幸せな経験だと思っている。「患者さんに寄り添い、つらい思いを少しでもなくしてあげたいと思える人にはやりがいのある仕事です」とメッセージをくれた。